京都府立盲学校資料室の教材・教具

稲本　正法
畿央大学教育学部現代教育学科（〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中4-2-2）

The teaching materials and teaching tools in the Kyoto prefectural blind school reference library

Masanori INAMOTO
Department of Education, Faculty of Education, Kio University
(4-2-2 Umami-naka, Koryo-cho, Kitakatsuragi-gun, Nara 635-0832, Japan)

要約　日本で初めて盲唖児の教育が行われたのは1878（明治11）年、京都盲唖院である。設立当時は点字が考案されていなかったので、京都盲唖院では見えない生徒の教育を進めるために凸字など様々な教材・教具を開発している。今回は、それらの貴重な教材・教具が保管されている京都府立盲学校資料室を訪れ、その中から「木刻凹凸文字」「木刻凸字（知足院の七十二例法）」「紙製凸字」「紙製凸字 イソップ物語」「盲生遊戯図（直行練習場）」「凸形京町図」を紹介する。

Keywords：京都盲唖院　凸字　京都府立盲学校資料室

はじめに

京都府立盲学校は、京都盲唖院として古河太四郎が1873－1875（明治6－8）年に「上京第十九組小学校（後の待賢小学校）瘖唖教場」で唖生の教育をはじめたのが発端となり、1878（明治11）年５月に創立された我が国初の盲唖者のための学校である。フランスのルイ・ブライユが６点からなる点字を考案したのは、1829（文政12）年であったが、日本の点字が考案されたのは1890（明治23）年である。従って、京都盲唖院創立当初には日本ではまだ点字が考案されておらず、見えない生徒が文字を読み、地図を理解し、また運動するためにはどうすればよいのかを考え、様々な工夫を取り入れて教材・教具や指導法を開発している。昨年、どのような教材・教具が保管されているのか、また、どのような指導を行っていたのかを知る目的で京都府立盲学校資料室を訪れ、教材・教具のいくつかに実際に触れることができた。資料室に保管されている教材・教具は、百年もの時間が流れているのを感じさせないものであった。以後、点字が考案されるまでの教育に触れ、京都府立盲学校資料室に保管されている教材・教具のいくつかを紹介する。

１．点字が考案されるまでの教育の試み

明治時代に入る以前、江戸時代には、庶民に対する教育は主に各地に作られた「寺小屋」で行われていた。『わが国特殊教育の成立』では、「実際、江戸時代の寺小屋では、盲児のみならず聾唖児、肢体不自由児のほか、精神薄弱らしき児童までもが指導を受けていたのである」[1]と寺子屋で障害児に対する教育が試みられていたと述べている。また、同じく同書では、寺子屋における盲児の指導を次のように紹介している。

「京橋区月松堂の師匠千葉城之介は、安政二年の頃一人の盲生を教へた。初めての経験故、最初はその背後に廻はり手を持ちて、その指頭で、いろは仮名の書き方を授けて見た所が、よく覚えて、僅に三箇月でいろは四十七文字を容易に書き得るに至った。それから童子教・実語教等の読物を授けたるに、皆善く記憶して少しも忘れず、殊にこの盲生は指頭の触覚非常に鋭敏であったから、師匠は更に一考案を廻らし、寺子が席書、書初等に書損じたる反古を、糊で幾枚も〳〵張り重ねて板紙を作り、砥の粉と漆とを煉り混ぜて、この板紙に凸字のいろはを書きそれを指頭で探り読ませた所が、既にいろはの文字を覚えてゐたること丶て、容易に指頭にて書き得るに至った」[2]とある。この寺子屋で行われていた教育は、凸字を用いて文字指導を行うという点では、凸字の素材こそ違うが、京都盲唖院の指導法とよく似ている。

また、同書では、「寺子屋におけるこの種の試みは特殊教育の前駆であり、かつ前駆以上のものではありえなかったということができる。そしてそこで行なわれていた教育はわれわれの先人達の創意と工夫による

２０２０年４月１日　投稿　　２０２０年５月１８日　受理

ものであって、流入しつつあった欧米特殊教育に関する諸情報とは無関係なものであったと云えよう。こうした個々の善意の凝集がわが国特殊教育成立への推進母体となるのである」[3]とも述べている。江戸時代から寺子屋で行われてきた見えない生徒に対する教育の試みが欧米からもたらされたものではなく、わが国固有のものであり、そういう教育の試みが京都盲唖院の教育につながっていることが分かる。

点字以前の文字指導には上述したような「かな文字」などを突出させた凸字が用いられていたことは述べてきたが、この他にも見えない生徒を教育する目的で様々な文字が考案されている。『古川氏盲唖教育法』[4]には、古川氏案出の訓盲字の大略が示され、次のような文字を紹介している。

（い）紙撚（こより）文字
厚紙の上に糊をつけた紙撚で字形を作ったもの。

（ろ）松脂文字
折板を温湯の上に置き、溶解した松脂で書き、煎糠(煎じたぬか)を撒いて作った凸形文字。

（は）凸凹木刻文字
木版一寸五分角表裏に凸凹文字を刻す。

（に）蠟盤文字
銅盤に調合せる蠟を容れ、鉄片を用いて字形又は物形溶解を刻したるものなり、銅盤を用ふるは火にて温度を加えれば直に平面に復し易ければなり。

（ほ）針跡文字
洋紙に針先にて別に製したる五十音符号文字を突き出し指読に供す。

（へ）五十音符号文字（表裏同画記得文字）
表裏同画記得文字にして左の四種とす。
凸文字から点字に移る中間的な符号文字で、古川氏は4種の文字と数字を考案している。

この他にも読書用文字として、むすび文字（むすび目の数と距離によっていろはを表したもの）や折り紙文字（縦9cm横5cmの紙片の角を折って文字符号を考案したもの）などの文字が考案されている。盲教育に取り組んだ創始者は、見えなくてもどのようにすれば文字を読むことができるようになるかを考え、日常にある素材を利用して読書用の文字を考案している。上記以外にも様々な創意工夫がなされた文字があっただろうことは想像に難しくない。今回の見学では、この中から、（は）凹凸木刻文字と（ろ）蠟盤文字を見ることができた。その中でも凹凸木刻文字は、現在の視覚障害教育の中でも十分活用可能であると感じた。現在、私達は同じような凸字を立体コピー機などを使って作成している。こうした京都盲唖院にある教材・教具等が単に古いというだけのものではなく、現在の私達の教育にも参考となることがあるのではないか。また、見えない生徒の教育に一から取り組もうとする姿勢にも学ぶことがあるのではないかと考え、京都府立盲学校の資料室の紹介をしようと考えた。

２．京都府立盲学校資料室の概要

京都府立盲学校は、1878（明治11）年、すでに述べたように古河太四郎らが創立した我が国初の盲学校である。今回は、京都府立盲学校に永年勤務されている岸博美氏の『視覚障害教育の源流をたどる』（2019、明石書店）を参考にしながら資料室に保管されている教材・教具の幾つかを紹介していく。

およそ48平方メートルの資料室には、京都府立盲学校の140年に及ぶ盲・ろう教育に関連する公文書、教材・教具・教科書・視覚障害教育関係の書籍、点字新聞、写真、フィルム、レコードなど多岐にわたる資料が保管されている。1990（平成２）年には、そのうちの700余点が京都府の有形文化財に指定されており、その後、2018（平成30）年に京都府立盲学校と同聾学校が所蔵する「京都盲唖院関係資料」一括3千点が国の重要文化財に指定された。

３．資料室に保管されている教材・教具

１）木刻凹凸文字

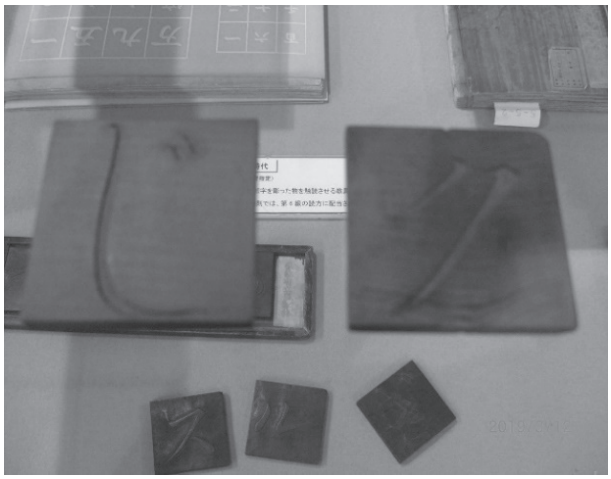
見えない生徒がしっかり触って学んでいたことが分かるものが木刻凹凸文字である。それは、岸が言うように百年以上前の木製の教具でありながら、つやつやと光沢を発している。たくさんの見えない生徒が触って学習していないと、こうはならないだろう。触ることを大事に考えてきた盲学校で永年保管されている教材・教具としての大きな価値を感じる。

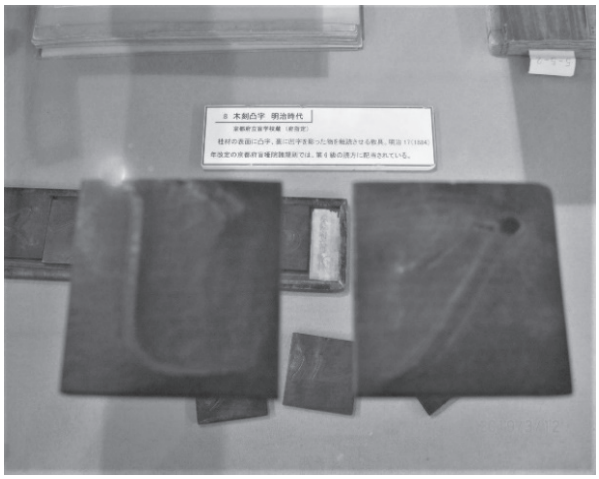
木刻凹凸文字は、桂あるいは桜材の、約６cmもしくは4.5cmの正方形の板に仮名の凸字や凹字を刻んだ木製の教具である。６cm大のものには、ほとんど片面に凸字が裏側に凹字が彫られており凸字の方が分かりやすい生徒、凹字の方が分かりやすい生徒など一人一人の分かりやすさに対応できるように工夫されている。また、この教具を使用する際、どちらの辺を上にして置けば正しい位置関係になるのかが分かるように四辺のうちの一辺の中央部に「三角の刻み」が彫られている[5]。ちょっとした工夫ではあるが、見えない生徒でも迷わず正しい方向に凹凸文字を置くことができ、一人でも効率よく学ぶことができる工夫だと感心してしまう。

現在、触覚を通した学びは、視覚障害だけでなく障

害のない幼児児童生徒の学びにとっても重要であると言われている。モンテッソーリ教育にもこのような触覚を通して文字を習得する教材・教具がある。また、一般にも市販されている「ゆびなぞりカード」は、くぼんだ文字をなぞり、ひらがな・数字を覚えるカードである。このように木刻凹凸文字は今の時代にも十分通じる教具でもある。

また、見えない生徒がしっかり触ることができるように、簡単に壊れないように彫刻家に製作を依頼し、品質の高い教具となっている。だからこそ百年以上経った今でも形が崩れず触ることができるのであろう。現在の支援学校では、教材・教具の作成に予算をさく余裕はない。しかし、専門性の継承という観点に立てば、先生方が、教材・教具の作成に関心を持ち、品質にもこだわりながら使い捨てにならないような教材・教具を作成し、また常にそれらを保管・整理できるような場所を確保することなど教材・教具の作成に予算をかけることも必要ではないかと感じる。



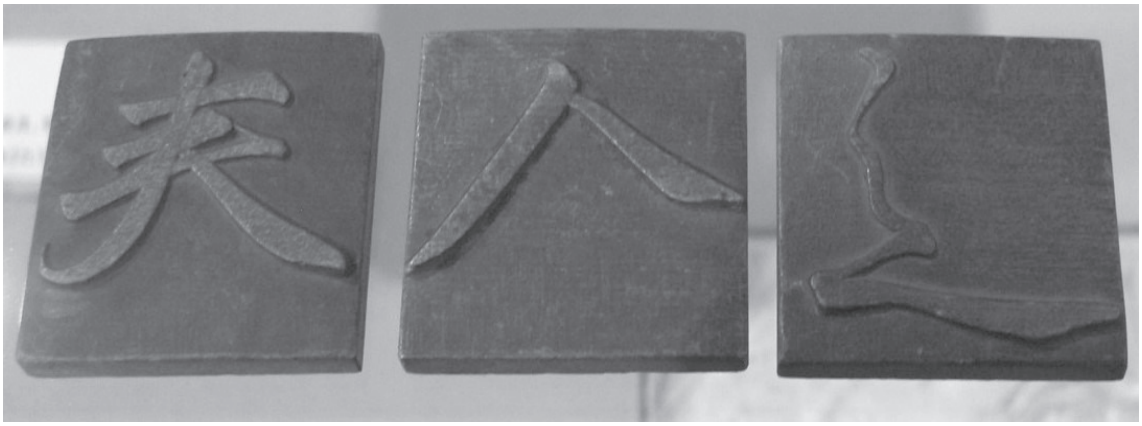


木刻凹凸文字（「じ」と「ク」）

２）木刻凸字（知足院の七十二例法）

同じように当時漢字を基本となる「字形」や「部首」に分けて習得させることを目的にした木刻凸字が作られ「知足院の七十二例法」と名付けられていた。岸によると古河がこの七十二例法とは何かと問われた時に、「古河は、『盲人の筆記する文字としては真[楷書]よりも崩し字[草書]が適切だ。崩し字での部首を分類し、それを一つずつ木の板に凸状に刻む。これによって、運筆と名称を教え、画数の少ない字から多い字へと発展させるのが適切である。蠟盤や針を用いて実際に漢字を書き、習熟を図っていく。』と答えている」[6)]と述べている。七十二の部首の中で今でもすぐにわかるものとして、うかんむり・くにがまえ・さんずい・りっとう・こざとへん・にんべん・けものへん・もんがまえなどがあり、その板の裏には部首の名称とそれを用いた文字の例が文字で記されており、指導者にとっても使いやすい工夫がされている。

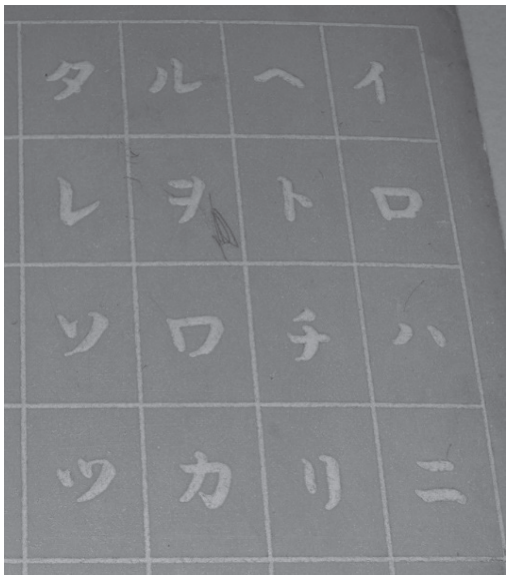
漢字を幾つかのパーツに分けて覚えていく指導法はまさに特別支援教育の中で実践されている指導法にもつながる。すでに明治期にこのような指導法が考えられている。視覚障害教育で実践されている内容が視覚障害以外の領域でも役立つのではないかと考えられる一例である。



木彫凸文字「知足院の七十二例法」

３）紙製凸字

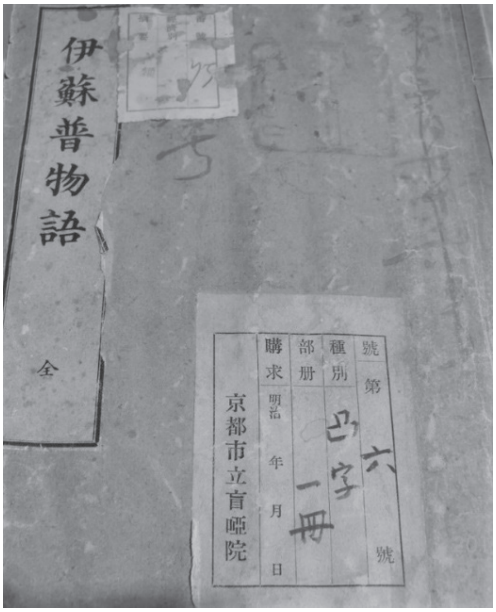
木製の教材・教具だけではなく、厚紙にプレス方式で文字を浮き上がらせ彩色したカタカナや漢数字などの紙製凸字がある。岸は、「紙製凸字は、木製に比べれば、型押しで簡易かつ安価に量産できるし、置き場所も省スペースで済んだ。いろは歌の並びでカタカナを一覧できるカードは、最も多いものだと28枚も残っている。10人を超えるような学級でも一斉授業が行えるほどの数が用意されていたわけだ。生徒が増えていった事実の反映とも理解しうる」[7]と述べている。一種の教科書のような役割をはたしていたのであろうか。また、この紙製凸字には、地の部分を青色、橙色、緑色で彩色した３タイプがあり、文字はいずれも白色である。こういった色の組み合わせをなぜ考えついたのか興味深いところである。当初教員のための使い勝手のためだと考えられていたそうだが、発足当初の盲唖院に弱視生がいたことが分かってきており、弱視生の見え方に対する配慮なのかもしれない。

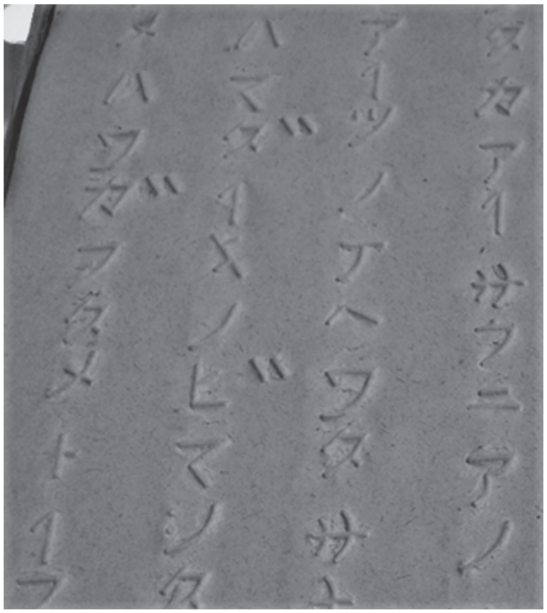


紙製凸字

４）紙製凸字　イソップ物語

この他にも一字一字丁寧に学んだ見えない生徒を岸の言うところの「文章の世界」に誘いたいと作成したものとして凸字によるイソップ物語がある。これは、片面33ページからなるすべてカタカナの凸字よりできている。凸線の高さは、1mm程度、幅は1mm余り、清音1文字は概ね縦横１～1.5cm角のサイズでできており、全部で14話が保存されている[8]。私が見学に伺ったときには、気が付かなかったのだが、「ウ」の二画目の縦線が省かれているなど単純化の手法が取り入れられており、さらに濁点、半濁点を極端に拡大して作るなど見えない生徒がどうすれば読みやすくなるのかを細かいところまで追求していることが分かる。当時の指導者の姿勢に学ぶことの多い教具である。

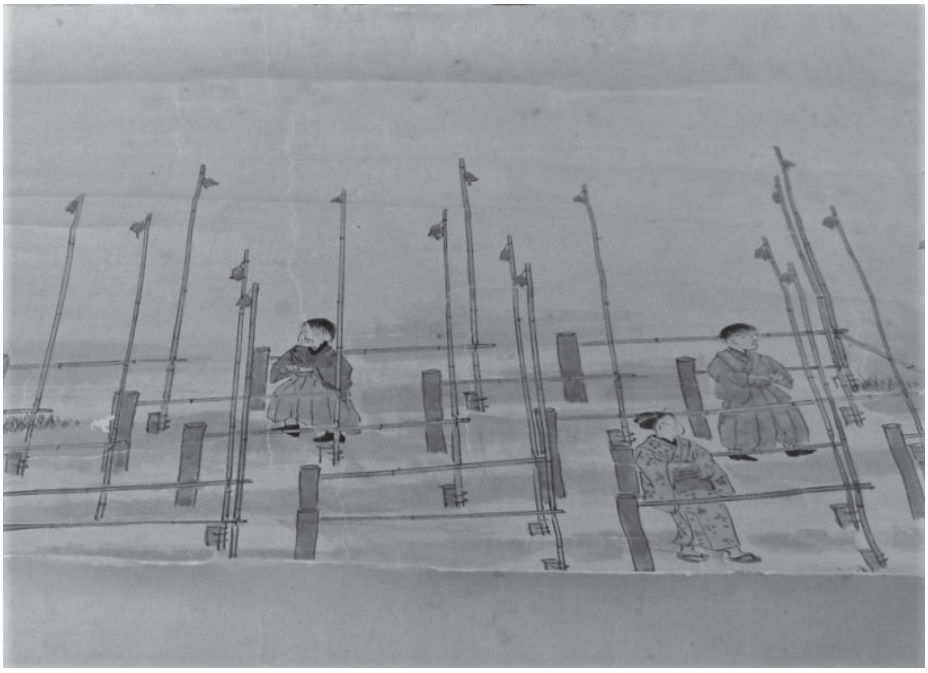




紙製凸字　イソップ物語

５）盲生遊戯図（直行練習場）

こういった読み書きの指導だけではなく、岸は、体育や遊戯の授業をどのように行っていたのかが分かる資料として「盲生遊戯図」という掛け図を紹介している[9)]。その中に直行練習場の様子を描いたものがある。長い竹竿の上に小さな鈴を付け、真っ直ぐ歩けなかったり、90°右や左にきちんと方向転換して歩きださなかったりすると竹竿にぶつかり鈴の音が鳴るといった仕組みであろうか。現在、私達が行っている歩行指導の中にもある程度の距離を真っ直ぐ歩くことができること。両足のかかとをくっつけた状態で右や左にきちんと90°方向転換できることを目標にした指導がある。いわゆる歩行指導に関わる自立活動の指導を明治期に常設施設を作って見えない生徒に指導していたことがわかる資料である。見えない生徒が一人で歩くための基礎能力としての直進歩行や方向転換の指導の重要性に気付き、実践していたことが分かる。



盲生遊戯図（直行練習場）

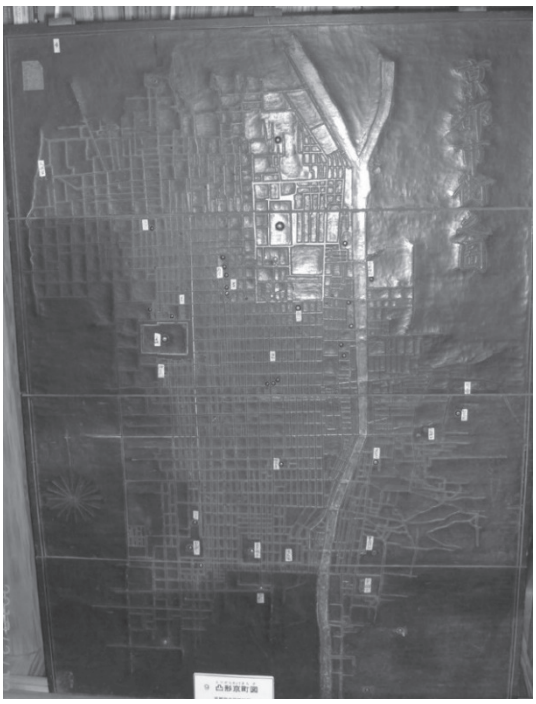
６）凸形京町図

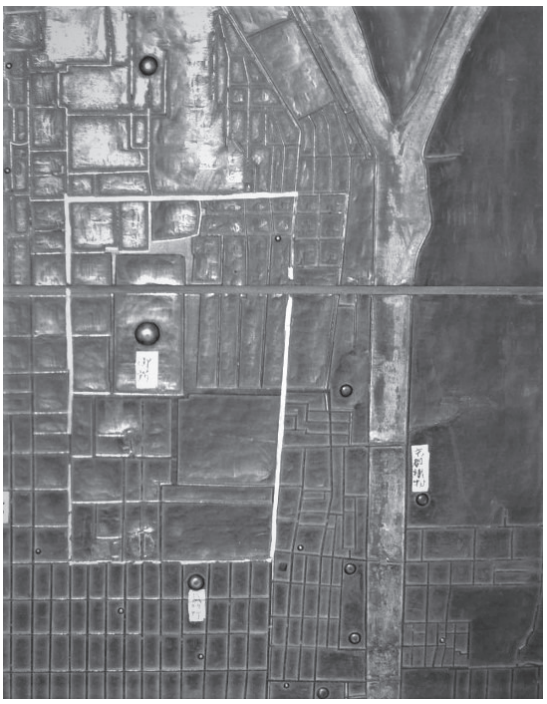
この資料室を訪れるとすぐ目にとまるのがこの凸形京町図である。岸は「縦132センチ、横94センチで、厚さは2センチ余。縦約33センチ×横約94センチの板４枚を頑丈に裏打ちしてつなぎあわせ、一枚板のようにしつらえてある。その表面に京都の市街地が彫られ、条里制の大通りなどが凸線で表されている。」[10)] と説明している。1879（明治12）年製の京都盲唖院を代表する至宝である。要所に大・中・小、幾種類かの鋲（凸上のマーク）が置かれ、最も大きな鋲が御所を表している。この京町図になぜ心ひかれるのか。それは、この京町図を見えない子どもや大人が一生所懸命触っている姿が目に浮かぶような教具だからである。手でしっかり触れながら、自分の家と盲唖学校、盲唖学校と御所など京都の様々な施設の位置関係などを学んだのであろう。この緻密な町図を作成したのも、木刻凹凸文字を制作した彫刻家である。その技術の高さを肌で感じることができる。机の広さの中でどうしても教えようと考えてしまう私たちにこの大きさの触れる地図を作ることができるのだろうかと考えてしまう。これからも大切に残していただきたい教材・教具の一つである。

おわりに

紹介した凸字は、読みの効率性などを考えると実用的ではなく、点字が導入されると利用頻度が低くなったのではないかと推測される。しかし、これらの凸字が明治期からきちんと保管されている。それは、内容・素材ともに質が高くて簡単に廃棄できるようなものではなく、このような凸字を用いることで見えない生徒にも文字を指導することができるという実践記録としての意味合いをもっているからだと考える。現在では、見えない生徒にも漢字の知識は必要だということで小学部から凸字を立体コピー機などで作成して指導を行っている。むしろ今、木刻凹凸文字のような凸字が必要なのではないかと感じた。

今回この報告をまとめるにあたり、視覚障害教育を始めた学校であるという自負、責任感のようなものが京都府立盲学校の先生方にはあり、永年教材・教具を大事に保管されていたのであろうと感じた。岸が言っ





凸形京町図

ている「京盲スピリッツ」とは少し違うかもしれないが、こういった教育実践力、自負を「京盲スピリッツ」と呼んでもいいのではないかと思う。「京盲スピリッツ」を「○○盲（視覚支援学校）スピリッツ」と言い換え、私たちがどのような行動を起こせばよいのかを考えるきっかけを与えていただいた。

資料室の見学を終えて、まだまだ見て、触れていないものがたくさんあると感じている。本物には、人の心を動かす力がある。ぜひ、皆さんも機会があれば素晴らしい教材・教具に出会っていただきたい。

謝辞

今回の資料作成にあたり、テーマの設定や内容など最後まで丁寧なご指導、ご助言をいただいた小野 尚香先生と大久保 賢一先生、そして、資料室の紹介を快くお許しいただいた京都府立盲学校の中江 祐前校長先生、岸 博美先生、坂本 健次郎先生に心よりお礼申し上げます。

引用・参考文献

1）中野善達、加藤康昭共著：『わが国特殊教育の成立』、東峰書房刊、東京、p118,1991
2）同書、p123
3）同書、p124
4）渡邊平之甫：『古川氏盲唖教育法（復刻版）』、京都府立盲学校創立百周年記念事業委員会、京都、pp52-58、1978、初出は文部省図書局、1913
5）岸博美：『視覚障害教育の源流をたどる』、明石書店、東京、pp42-45、2019
6）同書、pp46-49
7）同書、pp50-53
8）同書、pp76-79
9）同書、pp132-135
10）同書、pp124-127